



2012年4月発行

## 犯罪人が救われる

「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」。

(ルカによる福音書23章43節)

ゴルゴダの丘に三本の十字架が立っていました。二人の犯罪人がそれぞれ主イエスの右と左にはりつけにされたのです。彼らは強盗でありました。

二人の犯罪人はそれまで他人の財産を強奪しながら生きていました。何と恐ろしい、呪われた生涯でしょうか。彼らは地獄の責め苦を受けても当然の人たちでありました。

しかし、その中の一人が死の間際に救われたことを私たちは見えています。これは人間の常識では考えられないことでありました。

彼は十字架上で、「我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ」という言葉で、自分が死刑に値する者であることを認めました。この人がこのようになったのは、十字架にかけられているイエス・キリストに出会ったからだと考えられます。とりわけ「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」という言葉が彼の心のいちばん深いところに触れたのでしょう。自分を殺す敵をもつつみこむ愛が強盗の心を覆っていた氷のような思いを溶かし、神の憐れみを求めさせたのです。

彼は自分の犯した途方もない罪を自覚したので、もう一人の強盗がイエス様をののしった時にたしなめることが出来ました。彼はこのようなことを言ったのです。

「お前は神をも恐れぬのか。お前はおれと同じく十字架につけられているというのに、まだ神を恐れぬのか。」

あと何時間かでお前も俺も死ぬだろう。永遠の命かそれとも永遠の死か、救いかそれとも滅びか、それがわずかな時間の間に決まってしまうのだ。この時を逃したらもうチャンスはないんだぞ。…お前は神をも恐れぬのか。まもなく神の前に立たせられるこの大事な時に！」。

ここにいる私たちのうちの誰も、この時の強盗ほどに切羽詰った状況ではありません。しかし、自分の命がいつまでもつかということは、本当のところわかりません。皆さんがもしも今、自分の救いについて真剣に考えることがないなら、永遠にその時は来ないでしょう。今こうして自分の人生があるうちに、イエス様を信じ、その救いを受け入れなければなりません。

悔い改めた強盗の「この方は何も悪いことをしていない」という言葉は、イエス様への信仰を表わしています。彼はイエス様に罪がないことを認めました。では、罪のない方がなぜ十字架刑にかからなければならないのでしょうか。この人は無学な人だったかもしれませんが、イエス様の死がまさに自分たちのためであることをつかんだのだと思います。

「イエスよ、あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください」。この祈りに対して主イエスはただちに「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と告げて下さいました。イエス・キリストと共にいる、その場所が楽園なのです。

ご覧下さい。この強盗は一生の間、何も良いことをせず、悪事を重ねるばかりだったのです。もしも人が善い行いをするることによって救われるのなら、この人には何の望みもありません。この人が救われたのは、ただイエス様を信じる信仰によるものでした。

もしも彼がこの後、十字架から降りて、なおこの世で生きることが出来たなら、きっと善い行いをしたことなのでしょう。しかし、その時間は与えられませんでした。彼の命は断ち切られてしまいました。しかし、彼が主イエスと共に天に招き入れられるためには、それで十分だったのです。

主イエスは罪人を救うことがお出来になります。主イエスが強盗をさえ救うことが出来たのなら、この方が救うことの出来ない人などこの世にいないのでしょうか。

(2012年4月1日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊